

令和 8 年度 愛知県公民館主事等社会教育担当者研修会（2026/10/27）  
公民館基礎 A「実践から学ぶ 愛着がもてるまちづくりを実現するために」  
“ 関わりしろ ” で広がる地域づくり～「このまちにくだしたいプロジェクト」のケース

広島市亀山公民館職員・社会教育士 為政久雄

## はじめに

▽自己紹介

▽“関わりしろ”ってなに？…人や物事が関わるための余地・スペース・入り口

▽人口減少社会が「関係人口」の間口を広げて、“関わりしろ”に注目が?!

## 1. このまちについて

▽古田地区（広島市西区）というコミュニティ…「多世代」というアドバンテージ

### “関わりしろ” ポイント①「こどもの頃から地域に愛され育てられた人たち」

- ・生まれ育った地域で受けた恩恵…神楽、いちじく畑、幼少期に接した大人たちからの愛

## 2. プロジェクトが始まるまで

▽住民グループ「多世代寺子屋」始動（2012 年）…活動理念「CARE（編み直し）」のナナメの糸

▽こどもから大学生、子育て世代、社会人、シニアまで毎月交流の場をつくり 50 のプランを作成、実践

▽地元中学校長からの相談（生徒の ESD 活動）から「このまちにくだしたいプロジェクト」発足（2013 年）  
…きっかけをつくったのは地域で NPO 法人を運営する人（現在、広島市社会教育委員を務めている）

### “関わりしろ” ポイント②「コミュニティの中に混ざりたいと願っている人たち」

- ・まちには新旧住民、転勤や転校してきた人たち、町内会に属さないマンション住民、グループホーム入居者、世代ごとに孤立した人たち、学校の先生など、多様な住民が混在する…実はよそ者、新参者が入っていける混ざりやすい場所が必要

## 3. プロジェクトが紡ぐ物語

▽立ち上げ時の課題と克服（一年目の導入部分で工夫したこと）…話し合いのおきて、いちじく不動産、マチオモイ年表、30 年後の未来予想図など、ワークショップ中心に「まち」を知る時間を共有

### “関わりしろ” ポイント③「じぶんの思いを安心して伝えられる居場所を探している人たち」

- ・世代のギャップという煩わしさをどう乗り越える？…違いと共感を分かち合う時間の積み重ね

▽公園の騒音問題を共通課題として抱え、選んだテーマは「みんながしあわせにつかえる公園づくり」

▽公園について学習、住民アンケートをもとに公園活用プランを立案。住民へプランを提案するため、デモンストレーションイベントで発表。サイレントパーク（静かにあそぶ時間帯をつくる）は「誰一人取り残さない」生徒のやさしい思い

▽知らないこどもの声は騒音？ でも「顔の見えるコミュニティ」ならこどもの声はまちの力に。それが公園再生のヒントになる。

## 公民館基礎 A「実践から学ぶ 愛着がもてるまちづくりを実現するために」

### “ 関わりしろ ” で広がる地域づくり～「このまちにくだしたいプロジェクト」のケース

#### “関わりしろ” ポイント④「暮らしたいまちに自分が登場する物語をもつ人たち」

- ・生徒たちが 30 年後のこのまちで暮らす物語を描く…主人公として自分ごと化できる地域。まちには心に響く“物語”が必要。米社会学者マーシャル・ガンツ氏の「“物語”の力が社会を変える」
- ・住民活動のカキクケコ（感動→共感→空間→経験→行動）

▽中学生がつくる冒険遊び場「ワンダふるたパーク」誕生（2015 年）

#### “関わりしろ” ポイント⑤「困ったときに少しまわりから手を貸してくれる人たち」

- ・プロジェクトを進めるとき、まわりからどんな応援があった？…ひろしま NPO センター（環境省）、プレーパーク団体「もとまち自遊ひろば」、行政（区役所、市・区社協…）など小さな依存先を多数もつ

## 4. 生まれた交流と連携

▽地域内からも様々な応援団が。地域に住む達人、大道芸グループ、町内会、子ども会、女性会、老人クラブ、学区社協、地域食堂、包括支援センター…地域住民の理解と信頼が醸成される。

#### “関わりしろ” ポイント⑥「協働しながら共に暮らすコミュニティをつくる人たち」

- ・同じコミュニティに住む地域団体や住民からの様々な連携は、どうやって繋がったのか？どうやって巻き込んでいったのか？そしてどんな役割を果たしてくれたのか？…最も大切な“関わりしろ”
- ・ワンダふるたパーク協働体づくり（LMOへの参画など）

## 5. プロジェクトの展望

▽小学生サポーターが中学生になってプロジェクトに参加

▽卒業生が後輩をサポート

▽様々な進路…大学で SDGs に取り組む、ミュージシャンになる、アート系地域デザインを学ぶ

▽新たな担い手…サポーターの確保課題、マンネリを恐れずダウンサイジングしながら持続、2025 年にパーク 10 周年同窓会イベント

#### “関わりしろ” ポイント⑦「地域に愛され育てられ、そしてこのまちで暮らしたい人たち」

- ・地域の恩恵を受けた子どもたちが次の子どもたちに恩送りをする、世代を超えてバトンを渡しながらか、まち物語の糸が紡がれていく

## まとめ

▽住民の“やりたい”から始まっている（自発性）

▽まち（地域）に“おもしろい”があふれている（創造性）

▽いろんな“わずらわしい”が混ざりあっている（多様性）

## 公民館基礎 A 「実践から学ぶ 愛着がもてるまちづくりを実現するために」 “ 関わりしる ” で広がる地域づくり～「このまちにくだしたいプロジェクト」のケース

---

【参考】紹介事例の関連資料（二次元コードから閲覧・ダウンロードできます。）

### ●公民館ドキュメンタリー「若者がミライを開く（青春編・継承編）」

（月刊公民館ちゃんねる・2026 年 2 月公開）

※「このまちにくだしたいプロジェクト」の映像（継承編）は 17 分過ぎから  
始まります。



### ●公民館がつむぐ地域のものがたりー広島市古田公民館ー

（月刊公民館ちゃんねる・2020 年 10 月公開）



### ●公民館を拠点に中学生主体で立ち上げた「このまちにくだしたいプロジェクト」

（市町村アカデミー機関誌「アカデミア」2020 年冬・132 号掲載）



### ●このまちにくだしたいプロジェクト Facebook ページ



### ●このまちにくだしたいプロジェクトの外部評価実績

2018 年 第 71 回優良公民館表彰 最優秀館（文部科学大臣表彰）

2020 年 第 22 回広島ユネスコ活動奨励賞 社会部門

2022 年 まちづくりアワード 功労部門（国土交通大臣表彰）

## 論考

# このまちにきたい！ 中学生が“家”と呼ぶ場所 「ワンダふるたパーク」の10年



広島市亀山公民館（元古田公民館）職員（社会教育士） 為政 久雄

「君にとってここはどんな場所？」

「家……ホーム！」

一人の中学生が躊躇なく、さらりとつぶやいたその場所とは、公民館を拠点に12年目を迎えた「このまちにきたいプロジェクト」（以下、「まちプロ」と呼ぶ）。

## 1 30年後も暮らしたいまちをつくる

“このまち”とは広島市西区の古田地区。「まちプロ」が産声を上げた2013（平成25）年当時、私はそのエリアにある古田公民館にいました。ESD<sup>(※1)</sup>の推進校だった地元中学の校長先生が学外で生徒たちを学ばせたいと、地域の活動場所を探していました。それを聞きつけたのは地域で高齢者グループホームを運営しているNPO経営者のTさん。すぐさま公民館に駆け付け「生徒たちを受け入れようよ！」と迫ります。なぜなら、前年に公民館主催のワークショップから発足した「多世代寺子屋」という住民グループがあっ

たからです。Tさんもそのメンバーの一人で、人口減少社会の足音が近づくなか「高齢者や子育て世代……同じ世代をひとかたまりにしたサロンはたくさんあるのに、世代をこちゃ混ぜにした居場所がない！」そんな声が出発点でした。たしかに生きてきた時代が違えば、話はかみ合わないし、面倒くさい。だから「多世代寺子屋」では、子どもから大人まで世代が違うことのわずらわしさをあえて楽しむ活動を展開していたのです。

早速、中学生をどう受け入れてどんな活動にしていくのか、みんなで話し合いました。校長先生のリクエストだったESDの学習にもつながるように、30年後の未来も「このまちにきたい」と思える地域を多世代で一緒に考え、そして生徒を中心に住民活動に展開するプロジェクトにしていこうと構想を練りました。

最初に公募で集まったのは12人の中学生。さて、うまくいくのか……そんな不安をすぐ



みんなでどんなまちにしたいかを話し合う



中学生たちとワークショップ

ワンダふるたパークの様子



に払拭したのは、個性あふれるユニークな生徒たちです。約半年をかけたワークショップでは、それぞれの世代がまちへの想いを編み込んで地域の歴史を共有する巨大な年表づくり、自分が主人公として暮らしている30年後のまち物語の創作など、不思議で貴重な多世代による対話の時間を重ねていきました。

その成果を住民に向けて発表しましたが、なかでも生徒たちが一番思い入れの強かったテーマを絞り込んで、それをこれから地域のなかで実践していくという行動宣言も行いました。そのテーマは「公園再生」。子どもの声がうるさいという苦情が学校にも寄せられ使いづらくなった公園を、30年後には「みんなが幸せに使える場所にしたい」という生徒たちの願いがこのテーマを引き寄せました。

そして、この活動の潮目が大きく変わる出来事が2年目に起こります。先輩の想いを引き継いだ後輩たちはアンケート調査を行い、その仮説から自分たちのプランを計画し、公園でデモイベントを実行しました。その一つに「声を出さないで遊ぶ時間帯をつくる」というプランがありました。アンケートでは少数だった騒音問題を放置せず、公園の近所に夜勤明けの住民がいると想定し、午前中は忍者修行に見立てた静かな遊びを提案したのです。そのプレゼンを聞いた住民は生徒たちの優しい気持ちに心を打たれながらも、「子どもが声も出せない、そんなコミュニティにし

てはいけない」と返します。だれ一人見捨てない中学生のまちへの想いが導いたのは、「知らない子どもの声が騒音になるのなら、顔の見えるコミュニティをつくれればいい」という答えでした。

生徒たちは公園が多世代の居場所になるようにと、子どものための冒険遊び場「プレーパーク」をベースに、子どもたちを見守りながら親世代が交流できる無料の「カフェ」、シニア世代が手習いで覚えた皿回しなどを仕掛ける「大道芸」空間などを用意し、そこに集う人たちを柔らかく結び付け、「顔の見えるコミュニティ」を形成していったのです。

こうして、2年の準備期間を経た2015（平成27）年に、公民館近くの公園を拠点に古田の地名にちなんだ「ワンダふるたパーク」が誕生しました。現在では年4回開催され、毎回数百人の来園者でにぎわう「みんなが幸せに使える公園」へと生まれ変わっていきました。

さて、ここまでは『月刊公民館』2020年2月号にも詳細に寄稿しているところですが、同年私はこの公民館を離れることになりました。そこで、今回は「まちプロ」のその後と「ワンダふるたパーク」の10年が地域に何をもたらしたのか、生徒たちのその後の人生にどんな影響を与えたのかなどを取材してみました。そんなとき偶然、全国公民館連合会（全公連）から今年11月12日・13日

に開催される「全国公民館研究集会東京大会」で上映するショートムービーに「まちプロ」を取り上げたいという依頼をいただきました。テーマは「若者が地域のミライを開く」というもので、全公連や映画監督のご協力取材に立ち合わせていただき、プロジェクトにかかわったメンバーの声を検証しながら、公民館にできる地域づくりを3つの視点で、自分なりに考察してみました。

## 2 住民の“やりたい”から始まっている（自発性） —はじまりはいつも……まちの声

転勤は公民館職員の宿命ですが、年度末が近づくとう講座などの公民館事業を後任に引き継ぐ準備を始めます。そんなときよく、「だれにでもできるような仕事の仕方をしていくように」と釘を刺されることがあります。しかし、講座づくりは職員間でバトンタッチできたとしても、地域づくりはなかなか引き継ぎにくいものです。なぜなら、地域づくりの主たる担い手は職員ではなく住民だからです。だから、もしも引き継ぐことがあるとすれば、公民館の仕事をフェードアウトしても住民活動としてその地域に根付き持続できるかを考えます。消極的に聞こえるかもしれませんが、公民館がいつまでも深く関与するのではなく、いかに手放せるかを意識します。「協働」とか「パートナーシップ」とか行政側に聞こえのいい言葉はありますが、そのイニシアチブは限りなく住民側にあるべきです。そうならないければシフトが必要です。

もっといえば、そもそもの出発点がどこなのかが肝心です。これまで公民館事業としてかわりをもった地域づくりで、今も住民活動として継続しているものを振り返ると、はじまりはいつも何気ない住民の声からだったことに気づきます。

「まちプロ」も、公民館に駆け付けたTさんの相談が始まりでした。もちろん、公民館の当初の事業計画には挙がっていません。で

も来年に先送りできるような悠長なことは言っていない勢いだったので、やるなら今しかないと感じました。結果的に、住民の小さなつぶやきを形にしていくプロセスでワークショップを企画したり、生徒をサポートする運営プロジェクトを組織したりする作業で公民館の公共的機能は有効でした。

後にプロジェクトの代表となるKさんは「子どもたちが自由に遊べる場をつくりたい」と思っていたところに、偶然中学生が地域活動に参加したいという話を聞いて公民館にかかわるようになっていった」と語っています。

とにもかくにも、地域づくりの出発点は住民の「やりたい」という思いから始まっていることが最大のポイントになります。それは川に例えるなら源流に湧く一滴のしずくのようなもの。そんなまちの声を日々の雑談のなかで見逃さないように気をつけたいものです。

逆に、公民館から住民にお願いして始まった地域づくりは最初のボタンの掛け違えがいつまでも尾を引いてしまうケースもあります。予算があるうちはうまくいっているように見えても、何かトラブルが起こったり、それこそ頑張っていた担当者が異動したりすると、「これって公民館に頼まれたから始めたんだよね」みたいな……。

でも、住民発なら、その活動を「見える化」



「まちプロ」代表のKさんが大切にしているのは子どもたちの声が届くまちにすること

する立ち上げのサポートや、共感してくれる仲間の発掘など公民館の機能を利用すれば、たちまち予算がなくてもできることはあります。そこに公民館が地域づくりにかかわる存在意義があるのかもしれません。

そして、住民活動を地域づくりにつなげる次のステップは組織マネジメントの支援です。聞くだけで引いてしまいそうですが、あまり堅く考えずできそうなことから始めます。たとえば、お金が必要なら助成金や補助金の申請・報告書の書き方、イベント実施に伴う場所の使用許可や保健所・消防などへの手続き、既存の地域団体への根回しなどなど。でもこれらは公民館が代行できるうちはよいのですが、最終的には住民に返すべき仕事なので、何をどんな手順でやっているのかを一緒につくりながら共有していけるとよいのではないのでしょうか。楽しいことも面倒なこともひっくるめて、そこに住民の「やりたい」から始まっているという自発性さえあれば、あらゆる原動力になるはずです。

### 3 まちに“おもしろい”があふれている(創造性) —飛び出せ! 公民館ワールド

「ワンダふるたパーク」ではなぜか皿回しの達人が増殖しています。公民館のシニア向け地域デビュー講座でその特技をマスターしたにわか大道芸人が公園へ繰り出し、子ども

に皿の回し方を指南します。すぐにできると子どもたちは大喜び、祖父母世代の大道芸人たちはたちまち人気者になります。すると、まわりの親たちも最初は怪訝(けげん)そうに皿を手にしますが、そのうち子どもそっちのけで夫婦そろって回った皿をキャッチボールするあります。三世代が夢中で遊ぶ光景は公園の名物にもなっています。この仕掛人のOさんもプロジェクトの立ち上げからかかわっているメンバーで、「自分にとって公民館は若いころから人と出会える大事な場所でした。だから今はこの公園で人と人をつなぐキューピッドになりたいんです」と語ります。

おもしろいところに人は集まるし、集まればまた何かが生まれる。実に公民館は「ハコモノ」以上の可能性を秘めているのではないのでしょうか。とかく施設に集客する利用者数で評価されがちですが、Oさんのように公民館を飛び出し、学んだことを地域という表舞台で披露する人が増えれば、まちはおもしろくなります。公民館はまちに人を送り込む控室であり、何かが生まれる孵化器(ふかき)のような場所にもなります。たとえば、自分自身がこれまで携わった公民館事業にも、神社や河川敷などの公共空間でおもてなしのコーヒーを振る舞う「出前カフェ」や、商店街の空き店舗を使ったにぎわいづくりに公民館サークルを送り出す「動く公民館」などがあります。「ハ



ワンダふるたパーク名物の皿回し



ベレー帽がトレードマークの皿回し達人Oさんは子どもたちの人気者

コ」を飛び出すことで、未知数の出会い効果が生れます。でも、それこそが地域づくりの入り口になったりもします。

「ワンダふるたパーク」の場合、公園というどこにでもある地域資源を舞台に見立てれば、普段とは違う公園の様子が観客となる多くの住民の目に触れ、さまざまな声が掛かり始めます。ただ最初のころは、得体の知れない活動に「だれがやっているの？」「責任者は？」「お金はどうしているの？」など、心配とも苦情ともとれる声が届きますが、そのうち「たくさん子どもたちが集まっているらしい」「しかもその運営は中学生がやっているらしい」とわかると、徐々に声援へと変わっていききました。

そんなある日、地元子ども会から会員減少の影響で年末の餅つき行事の担い手、つまり餅をつく力持ちのお父さんが集まらないという相談が公民館に寄せられ、「ワンダふるたパーク」とタイアップすることになりました。代役を担ったのは中学生。数百人の子どもが集まり、子ども会のPRにもつながって、それ以降も連携が続いています。こうして地域からの信頼も醸成されると、そのうち町内会や地区社会福祉協議会、女性会、老人クラブなどの既存の地域団体から物心両面にわたる支援が寄せられるようになりました。きっと、そこにはこの地域の未来を担う中学生が中心にいたからなのかもしれません。



ワンダふるたパークとタイアップした子ども会の餅つき行事

まわりの応援団が増えていくことで、「ワンダふるたパーク」のおもしろき場はなおおもしろくなり、まちの人たちの創造性に満ちた空間へと変わっていききました。

#### 4 いろいろな“わすらわしい”が混ざり合っている(多様性) —いつのまにか、みんなの居場所に

深刻な人口減少とともに、都市部へ人口が集中するなか、広島に激震が走ります。2024年の人口移動報告で、転出超過が4年連続全国最多。しかも、その大半は20歳代の若者らしい。そんなとき、思い浮かぶのは高齢化が進み地域課題にあえぐコミュニティ。しかし、そんなコミュニティでよく耳にするのが世代間のあつれきだったりします。

「まちプロ」は多世代の居場所づくりで世代のギャップというわすらわしさを乗り越えられたのか。プロジェクトにかかわったメンバーの声から、この10年でどんな変容があったのかを振り返ります。

中学生を陰ながら引っ張ってきたKさんは「予想以上に中学生は大人でした。自分で考え、議論して、行動も起こします。特に3年間の成長度合いは、見ていて頼もしい限り。僕たち大人は彼らの声にもっと耳を傾けるべきです。このまちは昔ながらの団体や行事が根付いている分、新しい文化が生まれにくいと感じます。この活動で若い世代の感性にもあった居場所ができたかな。次に彼らが何をするか楽しみです」とその先を見据えます。

実は、このKさんや、前述の皿回し仕掛人のOさんも、子どものころにこのまちの大人たちからさまざまな恩恵を受けて育ってきた人たち。現在、Kさんは少年時代から参加している子ども神楽の後継者育成や青年団の世話役、Oさんは民生委員や町内会の世話役など、このプロジェクトとは別に地域の担い手としても活躍しています。ずっとこのまちに育てられてきたからこそ、今度は自分たちが

ら次の世代へ恩送りをするという素敵な循環が生まれているのです。

一方で、中学生や卒業したOBにとって「まちプロ」は何だったのでしょうか。冒頭で紹介した「ここは家」と答えた現役中学生のYさんに公園へ訪れた人たちにどう過ごしてほしいかを聞くと「ここでは子ども同士はすぐ仲良しになります。でも、大人も仲良くなってほしい。だって、大人同士って普段あんまり話してないでしょ？」子どもだけではなく、大人も孤立しないよう彼らに見守られているのかもしれない。公園の騒音問題を多数決で解決しなかった生徒たちが見つめているのは、だれ一人取り残さない社会なのです。そんな地域ならだれもが住んでみたくなるのではないのでしょうか。Yさんは「引きこもりがちだった自分が、ここでいろいろな世代の人と話すうちにコミュ力があがった」と言います。大半は学校で同世代と過ごす時期に、異年齢の人たちと気を遣わずに対話できる居場所があることは、彼らにとってある種の息苦しさから逃れるホットスポットなのかもしれません。そして、それは超高齢社会で「孤の時代」を生きる大人にとっても。きっと世代のギャップは対話の積み重ねで乗り越えられる、持続可能な地域づくりのヒントを中学生たちは教えてくれます。

もう一人、中学時代にプロジェクトリーダーを務めたOBのSさんは卒業後もずっと後輩たちを応援しながら、「あのこと、地域の大人たちからすごく大事にされていたんだなと、卒業してから気づきました。おかげで今は、このまちで暮らしたいと思えるし、離れられない場所になりました。今度は私たちが恩返しをする番かな」と、地域のボランティア活動にもかかわり始めています。さらにSさんは当時を振り返って、「親や先生からダメって言われることも多かったけど、ここでは否定されずにどんな意見も聞いてくれる家族のような大人や仲間がいました。だから、



この活動で地域への愛着を深めたOBのSさん

多様性のあるアイデアが生まれるし、やりたいことができる居心地のいい場所。中学時代にこのプロジェクトを選んだ自分に今は感謝したい。いろいろな考えを持った人が集まっているけど、唯一の共通点があるとすれば、このまちを思っていることかな」。

「ワンダふるたパーク」が生まれて10年。この間、さまざまな外部評価<sup>(※2)</sup>もいただきましたが、代表のKさんは「評価されるほど、すごいことをしているわけではありません。こじんまりとしながらも長く場が受け継がれるよう、気負わずに続けたい」と言います。

「まちプロ」のゴールは、公園再生を果たすことではありません。住民の声から多世代が混ざり合う居場所をつくって、30年後もそしてその先も“このまちでくらしたい”と願う人たちが世代のバトンをつないでいくことです。

ここはいつのまにか、みんなの“家”と呼ばれるサードプレイスになっていました。

※1 Education for Sustainable Development = 持続可能な開発のための教育

※2 2018年 第71回優良公民館表彰 最優秀館(文部科学大臣表彰)、2020年 第22回広島ユネスコ活動奨励賞 社会部門、2022年 第1回まちづくりアワード 功労部門(国土交通大臣表彰)